九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大城房美・一木順・本浜秀彦共編　『マンガは越境する』

波潟, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/19891

出版情報：九大日文. 16, pp.74-76, 2010-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

大城房美・一木順・本浜秀彦共編
『マンガは越境する』

波潟　剛（NAMIGATA Tsuyoshi）

そこに現れるのは、閉じない空間としての「地方」、記述に終わらない「歴史」表現、「ジェンダー」に決定されないジャンル、さらに「国境」という境界線を越えてゆくメディアとしてのマンガである。（大城房美「はじめに」）

タイトルに「越境」の語が入っていると親近感がわく。それは自著に同じ語をつけたから、という単純な理由。読む前の印象は、巷で取り沙汰されているクールジャパンに関する本だった。もちろんそうした要素も盛り込まれている。だが本書が目指しているのは、引用にあるような文化的価値観をめぐる種々の「越境」であり、わたしたちのアイデンティティ形成に深く関わる問題を幅広く扱っている。しかも、ここでいう「地方」とは九州を指す。ある意味意外な組み合わせだと感じ、マンガ研究においては、グローバリズムとローカリズムがどのように接続されていくのかと興味をもって読み進めた。

全体は二部立てで、第Ⅰ部『『国境』を越えるメディアとしてのマンガ」の論文六本と、第Ⅱ部『『越境』とローカリティ――記憶・地方」の論文五本、計一一本によって構成されている。

第Ⅰ部は、全体のイントロダクションの役割を果たす、伊藤遊「〈越境する〉日本マンガ」から始まる。日本政府が「メディア芸術」政策を打ち立て、著作を「コンテンツ」として扱い、経済・産業面を重視するに至った、アジアや欧米における日本マンガの急速な普及。またそうした日本マンガの普及にともなうファッションや料理をふくめたポピュラー・カルチャーとしての受容と、国境を越える際のずれや葛藤。さらに読者が作者となって参加できる敷居の低さといったマンガの特徴が浮き彫りにされる。

つづく三つの章では、マンガのグローバル化とそれにともなう多様な受容者に注目した論考が掲載されている。第二章ジャクリーヌ・ベルント「グローバル化するマンガ――その種類と感性文化――」では、ドイツ語圏における日本マンガの受容とともに、ファン共同体の姿をたどりつつ、現代文化における雑種性といった特徴がマンガをグローバル化させた要因であるという分析がなされる。第三章小野耕世「増殖するマンガ――ＭＡＮＧＡは世界に広がっている――」では、アニメとは異なる、「マンガ」独自のインパクトに注目して、日本マンガのスタイルを消化して作品を創作する書き手たちを、スイス、イギリス、インドネシア、カナダなどを例に取り上げる。第四章徳雅美「マンガとヴィジュアルカルチャー――描画発達における伝統と革新性――」では、こどもたちが描画発達のなかでどのように日本マンガの表現を身につけるのかという疑問から出発して、ア

メリカにおける日本マンガ受容の可能性や課題について論じている。

これらの論考で言及された情報にまず圧倒された。言い換えれば、どれほど自分がマンガを読まなくなり、マンガのグローバル化に疎かったのかを思い知らされた。素直に勉強になった。ただしそれのみに終わることなく、マンガ研究の話題でありながら、文学研究とも通じる点が非常に多いと感じた。プロとアマの書き手の関係について、海外における日本人作家のスタイル受容について、文章表現の獲得過程と文学の文体についてとわが身にひきつけて考えれば、それぞれ重要な課題が提供されている。専門家としての批評は困難であり、感想めいたことを並べることにしかならなくても、本誌で取り上げる意義がある。そういう思いのもとに、さらに内容を紹介しておきたい。

第Ⅰ部の後半はグローバル化する日本マンガがジェンダーの観点から考察される。第五章金慈恵「国境を越える少女マンガ――日本の少女マンガと韓国の純情マンガ――」は、韓国のマンガ史における日本マンガの位置づけを行っている。一九七〇年代においては日本の少女マンガが韓国の純情マンガの停滞を補う存在でもあったという指摘が興味深い。第六章大城房美「〈越境する〉少女マンガとジェンダー――」は、金髪の少女を描く少女マンガが、「日本」と「男性」を描かずに、あえて不在とする戦略を採用することによって女性の主体的表現を可能にし、スタイルの普遍化に成功したという考察である。

読者の性別や年齢層を区分けするという発想じたい、ふだん自分が見落としている問題意識である。この点で新鮮さを覚えた。これらは児童文学やライトノベルを論じるうえで重要な観点であろうし、「少女」向けであるにもかかわらず、「少女」ではない読者の存在をどのように扱うのかというような次元を、あらためて文学の領域でも考える必要があるだろう。

第Ⅱ部は、第七章村上知彦「一九七〇年代のまんが――『越境』するメディアへ――」から始まる。日本マンガの分岐点となった一九七〇年代を体験史的に記述しつつ、マンガの青年化、少女マンガとの新鮮な出会い、読者の新たなかかわりと批評の誕生、他ジャンルとの越境性について語っている。

つづく二つの章では一九七〇年代以降顕著となった地方マンガが考察の対象となる。第八章吉村和真「地方マンガのポジション――『クッキングパパ』を中心に――」では、地方マンガの広がりを概説したうえで、福岡を舞台とした『クッキングパパ』に描かれた風景や作品内の時間推移、人物像を決定する言葉遣いである「役割語」に注目して、地方と中央といった二項対立とは異なる位置から作品の評価を行っている。第九章一木順「望郷するマンガ――『博多っ子純情』におけるふるさと――」もまた、福岡を舞台とする地方マンガ『博多っ子純情』を例に、描かれた風景や、山笠の登場に関する計量的分析を交えながら、一九七〇年代のふるさとブームが起こった社会的要因を探っていく。

二論考が取り組んだ地方マンガの分析は、一九七〇年代の日本文学においても可能なのか。「地方」というには語弊がある

けれども、周縁の存在に対する関心の高まりという意味において、「外地引揚派」や「在日朝鮮人作家」への注目が高まる一九六〇年代後半以降の議論と重なる点があるのかどうか、今後考えてみたい問題である。その意味でも、作品のなかに描かれている風景や時間の推移が、現実の風景や時間とずれを生じさせ独自の時空間を形成することによって、一地方の枠を越えて多くの読者を惹きつけるという非常に魅力的な指摘を、長期連載マンガであるがゆえにうまれた特徴として閉じることなく、文学作品の分析にも活用する可能性を吟味してみたい。

第Ⅱ部の後半は沖縄を起点に論が進む。第一〇章島袋直子「沖縄とマンガ――地方から発信するということ――」は、編集者としての立場から、とくに一九八〇年代から現在に至る沖縄マンガの系譜をたどりつつ、地方からのマンガ発信について、中央誌との差別化、新人発掘の可能性といった観点を提示している。第一一章本浜秀彦「マンガにおける場所と記憶――『SEX』にみる戦後的無意識と皮膚の欲望――」は、沖縄、東京、神奈川を結ぶ「基地の街」を描いた『SEX』を例に、背景に描きこまれる「無意識」を通して、「暴力」の問題を考察している。

二つの論文は、沖縄出身者のマンガと、沖縄を描いたマンガという意味で違いがありつつも、実は、一九八〇年代末から一九九〇年代前半にかけて時代性を共有する部分もある。では当時、現地の人々が日々感じていた問題意識と、「ノンポリ」作家が無意識に炙り出してしまった「基地」の暴力性とはどのように連続、あるいは断絶しているのか。描く側と描かれる側とのかかわり方は、今後もさまざまな次元において検討する必要がある問題だといえる。

マンガと同様、マンガ研究もまた「越境」している。隣接する研究領域から学ぶことは多い。あらためてそう感じた一冊である。

（二〇一〇年二月　世界思想社　二七一頁　二二〇〇円＋税）

（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）